

氏名	繭山 桃子
ヨミガナ	マユヤマ モモコ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第433号
学位授与年月日	平成26年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 胎内化する都市 ―樂園図― 〈作品〉 ・Growing Garden ・In the Womb ・Polyphonic World

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	手塚 雄二
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	佐藤 道信
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	吉村 誠司
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	梅原 幸雄

（論文内容の要旨）

私たちは一体、自分が位置する土地の姿を“見る”事が出来るのであろうか。

それは自分の肉体を、他人が見るかのごとく客観視する事が不可能であるように、決してその全容を見通す事は出来ないものとする。

私たちはしばしば、自分の姿が映った鏡や写真を目にしたり、あるいは自らの声を、録音機器などを通じて耳にする時、違和感を覚える事がある。あるいはまた、神経の麻痺した肉体に触れた時、それが自分の肉体でありながら、まるで別の生き物の皮膚に触れるかのような感覚に見舞われる。これらは、肉体を携えた自己という存在が、すべて自己を中心とした思念と、全身に通う鋭敏な神経の上に形作られている事を意味する。

絵画制作を通じて自分を取り巻く土地の概観を捉えようとする試みは、私にとって、鏡や写真を見るように客観視するのではなく、その土地に住む人間として、日常の暮らしの中にその姿を手探るものであると考える。それは、ひたすら葉を咀嚼し続ける芋虫のごとく盲目的であり、変哲もない日々の暮らしを送るだけに過ぎないかもしれない。しかし、そうして土地に根差した人間でなければ見る事の出来ない、土地の姿があるのではないだろうか。

見知らぬ遠くの街をどれほど写真で認識したとしても、体験を伴わなければ、真の意味での土地柄の理解には繋がらないように、土地の認識には「居住」という体験の中での身体感覚が不可欠である。住まうこと、それは土地に同化し、埋もれていく事である。土地に「住む者」がいなければ、国も郷土も存在し得ないはずである。

「国家」あるいは「民族」を意味する“nation”が、そもそもラテン語の“nasci”「生まれる」を語源に持つ事からも、国土の擁するそれぞれの地は、その国に生まれ、あるいは自らを位置付けた人々のアイデンティティそのものの姿と言える。土地に根差す事とは、それぞれの土地柄を育む固有の文化の中に、自らの根拠を見出す事ではないだろうか。それは、自身を育む土壌に愛を持つ事とも言える。ここで言う「愛」とは自己愛にも似て、本能的に危機に晒されない安全な状態を望み、その安全を維持するために「護り、護られた状態」を望む事であるとする。

郷土としての「都市」をテーマに作品を描く私にとって、作品の背景には、都市の“内側に住む人間”としての「護り」と「断絶」の意識が潜在する。本論の主題に示した『胎内化』という言葉もまた、「護り」を意味する。私は都市を、子を安全な胎内に宿す母親のように、外の危険から内側の人間を隔離し、護り、包

み込む性質を持つものと考える。

都市の構造そのものが、自然界から過剰に護られた人為的な空間領域であるように、作品に描かれた「都市」は、例えば都市に対する自然、あるいは自己に対する他者といった、二極化した世界の「外側」に属するものを排した、「内側」の世界の象徴である。

「内側」を護ることは同時に「外側」を排除する事である。双方を分け隔て差別化する事によって、「内と外」の意味は強まり、互いに作用し合うのではないだろうか。こうした「内と外」という意識は、自身の制作動機と密接に関わりあってきた。本論では身近な環境としての「都市」を基軸に、自身の表現の根拠を言及するにあたっての足掛かりとした。そして論考を進める中で、「都市」という共同体と、絵画制作の上での個人の「内的世界」という、相反する概念を結ぶ道筋を示した。

第1章「郷里を描く」

『故郷』では、自作品における自然の姿を排した表現の背景に、人気の無く静かで自然豊かな山村と、都心近郊の住宅密集地域という二つの「郷里」を持つ自身の出自が原因する事に触れ、自作品において「自然」の姿を拒むに至った経緯を述べた。

『東京』では、自らの郷里として位置付けた都市東京の今日の姿に、絵画表現の上でさまざまな表現を試み得る土壌としての自らの見解を述べた。

第2章「都市の構造と人々の領域」

『都市の構造』では、人為的かつ構造的な性質を持つ都市構造の中で、「都市の内側」を体感し得る要素のひとつとして街路空間を挙げ、自らの見解を加えた。

『共存』では、街路空間の奥まりに棲む「内側の人々」の共存社会や、あるいは密接し細分化した土地形状がもたらすさまざまな事例の中に、人の姿を排した無人の都市風景として描く表現の一要因を示した。

第3章「外側」

『分け隔てる』では、密接するほどに「隔て」を要する私たちの共存社会において、「隔て」が作用する社会的、心理的なさまざまな要因に触れた。

『人界』では、「隔て」を置く事で二極化した世界、すなわち「内」と「外」とに分け隔てた異なる要素が働きかける意味を、「都市」と「自然」の在り方の中に考察した。また、「外側」の存在意義をゴバルビアスが示したバリ島の方角観を例に挙げながら検証した。

第4章「内側」

『純化した世界』では、異質な「外側」により意味の強められた「内側」の世界に焦点を当てた。内側、それは自然に対する都市であり、他者に対する自己であり、私にとっては作品世界そのものである。本章では、都市とりわけ人工物というモチーフに特化した表現に、「意図的に外側を排除した」内側の同質の物同士の、完結した世界観を描く狙いがある事を論じた。

『楽園図』では、排他的である代わりに争う事も無く、完結し満ち足りた同質の世界に「楽園」という一種の普遍性を見出し、それらを象徴するさまざまな事例を挙げながら、自作品の表現根拠をより具体的に明示した。

第5章「絵画的要素」

『色が象徴するもの』では、自作品における描画表現が、私なりの内的な楽園性を示す象徴である事を、ここでは黒に対峙する鮮やかな色彩としての表現に焦点を当てて言及した。また、その表現の背景にある「響き」について、自身と関わりのある音楽の要素に触れながら解説する。

『モチーフが象徴するもの』では、自作品において色彩と同じく象徴的な意味を持つモチーフが果たす役割について解説した。

終章「結論に代えて」

最期に、都市を主題とした自作品の中で唯一、同質の楽園である都市に異質なものを描いた一枚の作品を解説し、そこから見えてきた自分なりの見解に、土地に根差す事の意味と自覚を照らし合わせながら、結論として述べた。

(博士論文審査結果の要旨)

本論文は、郷土としての都市を描く筆者が、都市を「子を安全な胎内に宿す母親のように、外の危険から内側の人間を隔離し、護り、包み込む」一つの樂園と捉え、それと自身の制作との関係を論考したものである。筆者独特のイメージ展開が、高い論述力と論理性で綴られ、読者を引き込む内容になっている。

自然と都市に対する筆者のイメージは、少し変わっている。東京に生まれ育った筆者は、幼少期の数年間、東京と群馬の山間の家を行き来し、やがて後者の自然は美化され聖域化されたアンタッチャブルなものとなり、前者の都市のとくに夜景が現実の理想郷となっていく(第1章)。作品中の工事現場や駐車場、スポットライトのような街灯やカラーコーンが描かれた都市の夜景は、静まり返った夜の遊園地のようにも見える。この人気を感じさせながら人影のない都市の夜景を、胎内化された樂園と感じる筆者の都市論が第2～4章で展開され、第5章で自作品が解説されている。

第2章「都市の構造と人々の領域」では、同じ都市の中でもパブリック空間(外側)よりプライベート空間(内側)に魅かれ、両者をつなぐ道路が胎道に感じられること。第3章「外側」、第4章「内側」では、排除すべき外側を区別することで内側が護られ、両者の間に様々な形での境界が設定、設置されている様子を分析する。ここでの論述では、都市論、建築論、生物学、社会学、心理学など、様々な視点から都市構造や人の行動心理が分析されているが、一貫した文脈で破綻がなく、明快な論述が展開されている。とくにその過程で次第に明らかになるのは、人間の心理、行動、コミュニケーションへの筆者のきわめて繊細な関心と視察であり、そこには現代の社会と若者世代の心理環境が色濃く反映されている。「護る」相手がじつは他者という同じ人間であり、「共同体や集団との緊張に満ちた対立関係における負の帰属」「無数の他人同士が密接に隣り合う都市独特の隔たりの空間」、その都市の中での夜が、共同体への帰属と防御を模索する筆者にとって、絶妙のバランスがとれた「胎内」であることがわかる。

審査会では、筆者の独特なイメージを論理的、整合的にわかりやすく説明した論述力が、高く評価された。また人の行動、心理への洞察力と観察も鋭い。最新作では、アンタッチャブルな聖域だった自然を、都市楽園図に部分的に描きこむ新たな展開も見せ始めており、本論文の考察が筆者自身の一つの画期となった様子も見える。学位論文にふさわしい内容として、審査員一同の高い評価を得た。

(作品審査結果の要旨)

彼女は学部1年の時から表現に独自性を持ち、気持ちを画面に表す事が出来ていた。幼少の頃、人里離れた家で育ち、一人遊びで多くの時間を過ごしてきたからか、暗い画面からは、現実とは少し離れた彼女の心の部分を感じるような空気が漂っていた。技術的にはすでにたけており、一人遊びを愛するには十分な作家の精神を持ち合わせ、雰囲気のある作品を描いていた。そんな彼女が、修士・博士課程へと進むにつれ、洗練される事により表面的にも見やすく、内容的にもわかり易い整った画面へと変わってきた。それは、流行に乗った表面的な作業により、本来の彼女自身の心の部分が感じなくなっているともいえる。自分を掘り下げ深めていくか、イラスト系の流行作家へと流されていくか、今、過渡期にあるように思う。

修士の頃の作品 [かくれんぼ]・[Circle]・[4つの小品より] は学部時代の暗い(陰)表現が薄まりながらも、彼女の気持ちが感じられると共に、構成や表現が垢ぬけて見やすい画面となっている。画面から深みも感じられ気持ちの入った世界が表されている。修了制作である [可視光域の外構]・は構成がおもしろく空気感のある彼女の世界を感じる事が出来る。院展出品作である [urbanism]・にも彼女なりの視点と見せ方により、雰囲気のある叙情性を感じる作品に仕上がっている。[Luna Park]・[shooting star]・[Hexagonal grids]・[Spiral World] はそれまでの繭山さんとその後の彼女の作品の中間的な作品で、おもしろい作風になっている。現代の若い感性を感じさせつつ、繭山節も感じ、洗練された不思議な画面になっている。現実とも夢の中ともとれるそのイメージは、独自の感性によるものと思う。しかし、その後の作品 [Polyphonic World]・[Growi

ng Garden]・からは彼女の感性は消え、表面的で実在感の無いイラスト的な画面となった。自分の内面を表現するのではなく、表面的に自分を表現しようとしている。色も浅く、綺麗なわかり易い世界になっている。此の作画が、世の中に受け入れられる仕事かどうかは、後世に委ねたいと思う。

自分を表現する事は大変な作業の上になりたっていると思う。自分を貫き通す事、新しい事へのチャレンジ、これを両立する事は大変難しい事ではある。審査後、その表面的な作業にやや不満の声も聞かれた。が課題はあるとはいえ、作家としての将来への期待は高く評価され、学位にふさわしい実力を備えているとして、学位作品を合格とした。

(総合審査結果の要旨)

繭山桃子さんは、今までの日本画にはなかった現代的な視点を持っており、都会の中の孤独感を図形的に表現することで「都市＝楽園」という全く新しい日本画の概念を構築した。彼女は、人物を直接表現せずにカラーコーンやビル群、道路標識やタワーといった類の人工物によって暗示すると説明しているのだが、心識をもたない人工物に仏教で言う草木国土悉皆成仏、神道でいう八百万の神の考えを、絵画表現として取り入れることで都会のもつ宗教観を表現している。一般的には恐怖感を持つ暗闇に、人と関わらないという安心感を抱き、自分が安住できる楽園を描いている。この暗闇に広がる孤独な都市表現から、彼女の本当の楽園が見えてくる。特に作品にあらわれる都会の中のカラーコーンが彼女自身であるということも興味深く、彼女の独自性を感じさせる。

彼女の制作の評価すべきは、敢えて意思の疎通をとりやすいモチーフで臨まずに、意思の疎通をしにくい人工物である「都市」を通じて意思の疎通を図ろうとするところにあり、そこに今まで無かった日本画の概念をつくりあげようとする冒険心やチャレンジ精神が感じられる。日本画では普通、命あるものに考えを投影して作品を表現するが、彼女の作品にあらわれる風景からは、モーリス・ユトリロの描く風景の人間的な温かみなどとは異質の、新しい絵図を生みだそうとする気概が前面に感じられる。ただ、否定的な意見ではないのだが、先鋭的な概念を絵画表現しているからこそ、受け手である誰しにも説明を必要とせざるをえないものとならぬよう、絵と観る者がある程度の間合いを持つ事が必要になってくるだろう。

彼女が作り出した新しい日本画の概念「都市＝楽園」は、論述として高く評価し、審査員全員の協議の結果、論文研究作品共に学位研究に値すると判断した。今後優れた論文をつくりあげた彼女が、次の舞台に進み画家としての本領を発揮していくために、理路整然とした答えとは違い、答えの出ないところに美を見つけ、悩み苦しむ制作過程の中で表れる美を表現していく事を大いに期待するものである。